

## 国際エミー賞ノミネート「ピュアにダンス」 8年間の取材を通して

セイビン映像研究所 プロデューサー・撮影 河村 正敏

2003年より取材を続けている番組「ピュアにダンスⅣ ～田中家の7年～」が、2011年度のUSインターナショナルフィルム&ビデオフェスティバルで金賞を受賞しました。さらに、国際エミー賞ドキュメンタリー部門にノミネートされ、最優秀賞には手が届きませんでした。世界中の応募作品から最終候補の4本に選ばれたことは、とても嬉しく思います。

ダウン症のある青年の生き生きとした姿と家族の深い思いが、海外の人たちの心も惹きつけました。恋愛に一喜一憂し、結婚を夢見る、そんな誰にでもある青春を一生懸命に生きる姿が、そして家族が彼の将来について真剣に語り合う様子が、強い印象を与えたようです。授賞式では各国のテレビ制作者から「感動した！」と声をかけられました。放送のオフアームもいくつかあり、香港では具体的な話が進んでいます。

「ピュアにダンス」シリーズは、ダウン症のある人たちのエンターテインメントスク



米・ニューヨークでの国際エミー賞の授賞式で。河村正敏プロデューサー（右）と松田恵子ディレクター（左）

ール「ラブジャンクス」のメンバーが、好きなダンスや仕事に打ち込むことで自信をつけ、世界を広げていく姿を取材してきたものです。フジテレビの「ザ・ノンフィクション」という枠（関東ローカル）で、これまで5本の番組になりました。

主人公たちに出会ったのは8年前。初めてラブジャンクスのレッスンを見学したとき、メンバーが思いっきり踊るパワーと、楽しさを全身で表す感性の豊かさに魅了されました。この姿を多くの人に伝えたいと思い取材開始。

最初の頃は、彼らの心の内がわからず、長くカメラを回したこともあり。負担になった彼らが、自ら「以上、今日はこれでおしまいです！」と取材を打ち切ったり、ぎくしゃくしたりすることも度々ありました。しかし、次第に私たちも構えをなくしていくにつれ、彼らとコミュニケーションがとれるようになっていきました。

最近では、こちらの意図を以心伝心でキ



5人家族の田中家。兄たちが結婚して年々家族が増え、全員集合時には食卓がますますにぎやかに

ヤッチしているのではないかと思うほど、撮りたいと思う姿をカメラの前で見せてくれます。不思議ですが、「彼らは人の心が読めてしまう!？」と勝手に思っています。

今、取材テープは1,300本を超えています。そこには、驚くほどのスピードで世界を広げていった彼らの軌跡があります。場所と機会さえあれば、彼らはどんどん伸びていくと実感しています。

この8年、彼らの優しさに心が温められ、その明るさに心から笑って、どれほどたくさんプレゼントをもらったことでしょう。素直に自分の気持ちを出せる彼らには、人を惹き付ける魅力があります。彼らならではの才能と感性は社会に必要とされるものだと、取材を重ねるほどに、その思いは強くなっています。



30年前、私はドイツで、思想家ルドルフ・シュタイナーが開いた生活共同体を取材したことがあり、そのとき、のびのびと日々を生きるダウン症のある子どもたちに出会いました。シュタイナーが「彼らは、人類に対して未来へのメッセージを持って生まれてきた人たちで、目に見えない世界を感じることで



ダンスレッスンの合間に、二人だけの秘密の話を……  
「ピュアにダンスⅣ」主人公の田中良さんと吉岡智子さん

きる」という主旨のことを語っていると知り、それが私には非常に印象深く残っていました。

そして20数年後、ラブジャンクスのメンバーに会ったとき、このシュタイナーの言葉が蘇りました。千人に一人の割合で誕生する彼らは、より良い未来をつくる使者のような気がしてなりません。

しかし現実には、彼らにとっても、ご家族にとっても、大変なことが多々あり、社会での自立をはじめ問題は様々にあるかと思えます。そのような中、私たちは一生懸命に生きる彼らを撮影し続け、彼らの生の声、多彩な表情を伝えていきたいと思っています。

そしていずれ、当初から目標としていた映画にまとめたいと思います。また、WEBサイトを開いて彼らの声を届ける活動も立ち上げられたらと考えています。



最後に、ダウン症への理解を広げるために、取材を受ける負担を越えて協力くださった田中家・待寺家・吉岡家・羽鳥家、ラブジャンクスのご家族のみなさん、そして牧野アンナさんとスタッフのみなさんには心から感謝しています。共にこれからも彼らの生き生きした姿を伝えていきたいと思っています。



観る人に元気と勇気を与えるパワフルなラブジャンクスのダンスステージ。右から2番目が牧野アンナさん